

リレー連載 理事が語る

何でも e-Learning にすれば良いのか

神奈川県庁 岩崎 和隆

東京都立新宿山吹高等学校 高橋正憲

このたび、理事を拝命いたしました高橋正憲と申します。この職務を精一杯努めたいと考えております。よろしくお願ひ申し上げます。

「何でも e-Learning にすれば良いのか。」

これは、私が大学生であったときに、専修大学の魚田勝臣先生から厳しくご指摘頂いた言葉です。大学の卒業論文のテーマを決める際に、学校の授業を e-Learning であるような卒論テーマ案を出したところ、魚田先生から冒頭の言葉を言われました。

私が深く考えずに、安易に「e-Learning」を提案したことを鋭く見抜きご指摘頂いたのだと思います。

近年の社会は著しく変わり、新型コロナウイルスの感染拡大の影響から大きく日常が変化しました。これまで一部でしか行われてこなかったオンライン会議やオンライン授業などが当然のように実施され、テレワークも多くの企業や職場で実施され、これまで働きにくかった人があらゆる分野で働く機会を得ることができました。

これまでコンピュータに触れる機会のなかった人までが、コンピュータに触れ、コンピュータの有難さや便利さに気づいたのではないのでしょうか。情報システムの仕組みや構成、ネットワークの仕組みなどの詳しい知識や技術がなくても、遠く離れた人とつながることができ、これまで知らなかった多数の人々と簡単につながることができる社会が実現されたのではないのでしょうか。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大が収束していくにつれて、また社会は動き出します。私は、高校で教員をしておりますが、高校では、オンライン授業はなくなり、対面での授業を行っています。新型コロナウイルスの感染拡大で制限されていた協働学習やグループワークも以前のように実施されています。

では、なぜ新型コロナウイルスの感染拡大によって日常が大きく変化しオンライン上で情報交換やつながりができたのにもかかわらず、学校は対面の授業を実施し、講演会やセミナーは対面でも実施しようとするのでしょうか。

その答えは、冒頭の「何でも e-Learning にすれば良いのか。」という魚田先生という言葉にあると思います。情報技術の発展によって、多くの利便性や効率性が実現されましたが、人と人のつながりでは何を大切にしないといけないのかを考えなければなりません。オンライン上でつながることの有効性を理解しつつ、対面で会って、人と人とのコミュニケーションとっていく大切さも考えていく必要があるかと思ひます。

高校では、現在生成 AI の話題が急増し、至るところで話を聞きます。他にもメタバース等の話題が増えています。しかし、新しいものだからといってすぐに飛びつくのではなく、本当にそれが必要なのかど

うか、物事の本質を見極めることが大切です。何事にも好奇心を持ってすぐに取り組むことは大切ですが、物事の本質を見極められないと流されてしまい、本当に大切なことを見失ってしまいます。安易に世の中の表面上の新しさに流されず、自分で深く考え、物事の本質を見極める力が必要です。

魚田先生の言葉は、大学を卒業してからも常に頭の中にあり、本質を見極め、自分で深く考えないといけないと、気持ちを改めさせられています。

物事の本質を見極め、本当に大切なものは何か、何が人間にとって必要なことなのか、何をしないといけないのかを考えて行動することの大切さを次の世代に伝えていきたいと思います。